

## 「投下資本利益率について」 ～収益性分析 2～

「収益性分析」とは、企業がどれくらいの収益力をもっているかを検討するものです。

前回説明しました「売上高利益率」は、企業の収益性を分析するうえで重要な指標ですが、これは損益計算書項目のみを判定材料としています。今回は、**貸借対照表項目も組み入れて**、収益性分析のポイントを説明していきます。

企業は利益をあげるために、会社の設備や従業員を使ったり、商品を仕入れたり、借金をしたりします。つまり、**元手（資本）をかける**わけです。

収益性や効率性の高い経営とは、企業が活動するために使った**元手（資本）は小さく**、その結果得られた**成果（利益）は大きい**経営のことをいいます。

したがって、資本と利益の関係をチェックする必要があります。つまり、**投下資本に対するリターン（獲得利益額）の大きさから企業の収益獲得能力を分析**することが、収益性分析の基本的な考え方となります。

さて、「投下資本利益率」は資本（貸借対照表項目）と利益（損益計算諸項目）の組み合わせで様々な指標がありますが、「**ROA（総資本利益率）**」と「**ROE（自己資本利益率）**」が企業業績の財務指標としての利用頻度の高いものとされています。

そこで**収益性や効率性を判断する上で最も重要な指標**である「**ROA(総資本利益率)**」についてみていきましょう。

$$\text{ROA（総資本利益率）} = \frac{\text{利益（成果）}}{\text{総資本（元手）}} \times 100$$

例えば、手元にある1000万円の資金で、  
500万円ずつ別々の投資（A投資・B投資）を行ったとします。

そこで、A投資の成果（利益）が30万円、B投資の成果（利益）が45万円だったとします。

$$\text{< A 投資 >} \quad \frac{30 \text{ 万円}}{500 \text{ 万円}} \times 100 = 6\%$$

$$\text{< B 投資 >} \quad \frac{45 \text{ 万円}}{500 \text{ 万円}} \times 100 = 9\%$$

この場合、投資額（元手）は同じなので解りやすいのですが、  
B投資はA投資の1.5倍の効率が上がり、  
経済性も高いことが読み取ることができます。

再度、ROA（総資本利益率）の計算式を確認下さい。

分母の「総資本」は、貸借対照表項目の「負債（他人資本）と純資産（株主資本）」を合計したものです。

一方、分子の「利益」は損益計算諸項目です。

利益（成果）については、「営業利益」「経常利益」「当期純利益」がありますが、  
企業間比較を行うために、どの利益を使用しても良いことになっています。

この中でも最もポピュラーに使われている「経常利益」を分子とする「総資本経常利益率」  
について説明します。

「総資本経常利益率」は、会社の基礎体力ともいべき「経常利益」に対し、  
その利益をあげるのにどれだけの資本をかけたかを判断する指標です。

たとえば、総資本が5000万円、経常利益が1000万円の  
会社の「ROA（総資本経常利益率）」は、20%となります。

$$\text{ROA} = \frac{\text{経常利益 } 1000 \text{ 万円}}{\text{総資本 } 5000 \text{ 万円}} \times 100\% = 20\%$$

これは、総資本100円に対し、20円の経常利益を獲得したことを表しています。

「総資本経常利益率」が高まれば、経営効率が高まります。

したがって、「総資本経常利益率」に着目することにより、  
いかに効率よく利益をあげているかを見ることができるとのことです。

しかしながら、比率を算出することで収益性が分かったとしても、  
なぜそうなったのかまでは明らかになりません。

また、仮に比率が悪かった場合は、改善策を考えなければなりません。

そこで、この「総資本経常利益率」の算式に

「売上高」を導入させ算式を分解してみると、  
最善策のポイントを探ることができます。

$$\text{ROA} = \frac{\text{経常利益}}{\text{総資本}} \times \frac{\text{売上高}}{\text{総資本}}$$

(売上高経常利益率)                      (総資本回転率)

(売上高経常利益率)については、前回のところを確認ください。

(総資本回転率)は、総資本に対する売上高の割合であり、  
ある期間において総資本が何回売上高になったかを示しており、  
高いほど資本(元手)を効率よく運用していることとなり、  
収益性も良好となります。

この分解算式について、(総資本回転率)を次回に詳しく説明します。